

## 1 従来型の教師

これまで教師は「正しい答え」をもつ権威者であり、生徒は、教師からの知識を学びとるという受動的な存在であったと思う。そのため子供は、効率的に知識や技能を注ぎ込まれる対象となっていた。いまでもそう考えている教師がいる。こうした関係の中での子供が学ぶ過程は、授業者からの問い、学習者の応答、そして授業者の子供への解説という、ほぼ3つの活動だけである。このような考えをもつ教師にアクティブ・ラーニングの意義を説明すると、きまって次のようなコメントが返ってくる。

- ・アクティブ・ラーニングは、授業の進度を遅くする。
- ・授業中、子供が立ち歩くため、クラスの秩序を乱す。学習効率を悪くする。
- ・教えないのは、教師の怠慢である。
- ・受験を考えると、教師が教えるのが当然のことではないか。
- ・子供が主体的な授業は、教師不要論を生み出しやすい。
- ・専門性を教え込むため、教師がたくさん話すのは当然のことである。

こうした声を出す教師は、学習指導領総則を十分に読み込んでいないためか、マスコミが拍手をする予備校講師や、語り倒す教師の授業を称賛する面もあった。教師本人の自らの学校時代の経験値からきているのであろう。そのため、自分の感性になぜか自信満々の教師がおり、いまだに自分を変えきれていない。だから、学習指導要領が何度も何度も変わっても「ティーチングからラーニング」へパラダイム転換ができていない。

## 2 授業は生きる上での一場面

授業は、学習者が学び方を身につけ、自己実現していくための環境の一つの場にしか過ぎない。まして、子供の学力は、教師の教えや、学校からの学力向上策だけで培われるものではない。特に、授業における「学び方」や「気づき」は、教師の指導の範疇の中で起こるものではない。子供たちにとって授業は、生きる上での一場面にしか過ぎないからだ。だから、授業の中で、学び方を学ぶ、学習意欲を育てる、仲間との協働学習の中で問題解決を行うことが重要なのだ。

## 3 「ティーチングからラーニング」へパラダイム転換

子供が目標をもたないで、教師から一方的に知識や技能を注入される授業は、それがたとえ、効率的であったり、繰り返しの内容であったとしても、本当の教育効果は上がらない。子供自身が、自分の足りない面を知り、自ら解決していこうと自覚することによって、はじめて解決目標が設定される。そうすることにより、子供が自ら変化し、行動を起こしていく。

これまでの知識注入一辺倒の授業ではもう立ちいかない現状を踏まえ、授業を再構築し、子供たちが持てる知識で活用に向かわせ、他者と協働するような学びを模索させることが教師には求められると思う。社会に出ても学び続ける力、生徒の態度を変える力、学び方を学ぶということを授業の中でもっと焦点化するとよい。アクティブ・ラーニングが、子供に確かな学力を育て、教師自身の授業観や学習観を変えるものであれば、それは一つの学級・学校だけでなく、学校・社会全体総がかりで進められなければならない

## 4 全員活躍型の授業(フルメンバー(子供全員)・フルタイム(45~50分)・フルアクティブ(能動的)な授業

学校は何のためにあるのだろうか。子供が分からないことがあると隣の仲間に聞くから学校の存在がある。一人で勉強をするなら学校は要らない。一人では効率が悪いから子供は仲間と学校で学ぶのだ。

- ①知識・技能などを教師が一方的に注入するのではなく、双方向的・多方向から展開される授業
- ②子供が聞く・書くだけに終わる授業ではなく、考えること、気づきこと、発信すること(アウトプット)の活動を取り入れた授業
- ③教師が充実した「教材分析」と教材観をもち、子供に納得と安心、信頼感を与える授業
- ④言語活動を通して子供の思考・判断・表現が一体的・循環的に進められる授業